

の体験野が中間的な関係の人々に出現し、家族に出現しなかった理由を推測すれば、家族は自身の水俣病を隠すべき世間ではなかったためと考えられた。

5 顕著な解体症状にバルプロ酸が有効であった分裂感情障害の一例

奈良 康・小泉暢大栄・本田 潤
高橋 誠・村竹 辰之・染矢 俊幸*
新潟大学医学部附属病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*

分裂感情障害の治療は、抗躁薬、抗うつ薬、抗精神病薬を症状に応じて単剤又は、併用するのが一般的である。抑うつ型は双極型に比べ治療手段は少なく、双極型で有効な carbamazepine (CBZ) や valproate (VPA) の効果は低いとされる。今回我々は抑うつ型の分裂感情障害で出現した顕著な解体症状に対し VPA が有効であった一症例を経験したのでここに報告する。

症例は 60 歳の女性。X 年 2 月より、抑うつ症状、貧困・虚無妄想が出現し他医にて薬物療法を受けたが効果なく、5 月に当科入院となった。入院当初、精神病像を伴う大うつ病と診断され、高用量の paroxetine (60mg) により、抑うつ症状、妄想とも改善した。しかし、8 月中旬より多弁傾向、過干渉を伴う解体症状が出現し、さらに、抑うつ症状と妄想も再燃した。この解体症状に対して risperidone は無効であった。Risperidone を中止し、paroxetine のみで加療継続した結果、抑うつ症状、妄想、解体症状は改善した。11 月に再度、8 月のエピソードと同様の解体症状が生じたとき、VPA はこの解体症状を軽減し、増悪・寛解を繰り返す抑うつ症状と妄想を安定させることができた。

本症例の、多弁傾向で始まり、過干渉、感情の不安定を伴うエピソードには気分高揚や自我の肥大を伴わない為、これは躁病エピソードではなく、解体エピソードと考えるのが適切である。今回のエピソード中、精神分裂病の活動期又は、残遺期

の症状が一貫して存在し、大部分の期間で大うつ病のエピソードも存在する。この為、分裂感情障害抑うつ型と診断した。本症例では、寛解期に突然解体症状が出現し、抑うつ症状と妄想の再燃につながるという特徴が見られた。

分裂感情障害の治療方針は先述の如く、抗躁薬、抗うつ薬、抗精神病薬が症状に応じて単剤又は、併用で用いられる。双極型では lithium が有効であり、単剤、又は抗精神病薬と併用される。抗躁作用のある CBZ や VPA も多く用いられる。最近特に、VPA の使用頻度が高く、VPA の有用性を示す文献も多い。抑うつ型では、抗うつ薬、抗精神病薬を単剤又は、併用することが一般的とされるが、両者の併用の効果に対しては疑問視する説が多く、抗うつ薬単剤にも劣ると述べる研究報告もある。Lithium や VPA の効果は少なく、維持療法としても有効性は低いとされる。従来、VPA は双極型に有効であるが、本症例の解体症状にも有効であった。このことは、VPA が分裂感情障害の躁病エピソードだけでなく、抑うつ型の分裂感情障害にも有効であることを示唆しており、VPA は分裂感情障害そのものの治療に有効である可能性がある。

6 著明な脳室拡大を伴う精神分裂病の 1 例

宮本 忍・細木 俊宏・村竹 辰之
塩入 俊樹*・染矢 俊幸*
新潟大学医学部附属病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*

著明な脳室拡大を伴う精神分裂病の症例を経験したので報告する。

【症例】35 歳、女性

【主訴】感情の不安定性、幻聴

【家族歴・既往歴】精神科的遺伝負因、周産期障害や脳炎、頭部外傷などの中枢神経疾患の既往なし。

【現病歴】高校卒業ごろより被注察感が出現し、X-2 年、34 歳時から注察妄想、考想伝播、思考化声、幻聴が出現。X-1 年 5 月、精神分裂病と

診断されたが、服薬、通院はしなかった。X年2月、ハロペリドール4.5mg、カルバマゼピン100mg、レボメプロマジン10mgで治療を開始し、幻聴はほとんど消失した。6月、幻聴が増加、リスペリドン6mg、レボメプロマジン15mgまで増量したが症状改善せず、8月27日当科紹介初診、9月13日当科入院。

【入院時所見】表情は軽度弛緩し、会話はスムーズで的確に答えるが、活気に乏しい。自分の名前を呼ばれるという幻聴が、1日に1回程度ある。理学的所見に異常なし。

【検査所見】脳波は正常。WAIS-Rでは、VIQ 88, PIQ 83, TIQ 84。頭部MRIでは、側脳室、第三脳室、第四脳室の著明な拡大を認めるが、脳脊髄液の循環を妨げるような閉塞部位はなし。白質に病変は認めず、皮質の萎縮も認めない。SPECTでは、脳室拡大により、皮質以外の血流は減少しているが、皮質、基底核、視床の血流は保たれている。

【入院後経過】リスペリドン6mgで治療を開始し、入院直後より幻聴はほとんど聞こえなくなった。10月10日よりリスペリドンを4mgに減量、その後も状態安定していたため、11月20日退院した。

【考察】本症例では全脳室の著明な拡大を認めたが、脳脊髄液の循環を妨げるような閉塞部位は認めなかった。また水頭症は否定的であった。本症例の脳室拡大は胎生期の異常が原因で形成されたと推測された。

中脳水道の狭窄を伴う水頭症に幻覚、妄想などの分裂病様症状が出現した症例の報告があるが、身体所見、狭窄を伴う点で本症例とは異なっていた。著明な側脳室の拡大を認め、中年期に幻覚・妄想・パーキンソン症状を呈した症例の剖検例の報告では、先天性の形態変化が推測され、本症例との共通点を認めた。

精神分裂病患者では、発症初期からの側脳室・第三脳室の拡大が報告されており、神経発達障害仮説と関連して注目されている。また精神分裂病患者の死後脳では、細胞構築の異常にグリオーシスを伴わないことから、胎生中期における発達障

害が推測され、この仮説を支持している。

本症例では、胎生期からの形態異常が示唆され、神経発達障害仮説と関連している可能性もあるが、神経症状や水頭症を伴わず、著明な脳室拡大が画像検査で発見される例もあり、本症例の脳室拡大と、精神症状は独立した現象であった可能性も否定できなかった。

7 人格変化を伴う痴呆症状を呈し特異な白質変化を示した Leukoencephalopathy with vanishing white matter の1例

須貝 拓朗・下畑 享良**・大竹 弘哲**
寺島 健史**・徐 利恵**・塩入 俊樹*
村竹 辰之・細木 俊宏・辻 省次**
染矢 俊幸*

新潟大学医学部附属病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*
新潟大学脳研究所神経内科**

人格変化を伴う痴呆症状を呈し、加えて画像上極めて特異な白質病変を示した Leukoencephalopathy with vanishing white matter (以下LVWM)の症例を経験したので報告する。

〔症例〕51歳の既婚女性。少なくとも30歳以前は記憶障害、人格変化などの痴呆症状はなかった。X年(36歳時)結婚。この時すでに易怒的、無関心な態度を認めていた。X+2年、交通事故に逢い約4ヶ月の入院生活を送ったがこの際頭部外傷等は認めなかった。X+4年、仕事に就いてもすぐに解雇されることが続いた。X+10年、万引き行為を繰り返し刑務所に服役。X+14年、高度の痴呆を疑われ、当科に医療保護入院となった。

HDS-R: 9点と高度の痴呆症状を認め、WAIS-RではTIQ: 51と知的レベルの低下もみられた。特に記憶障害(瞬時記憶)、見当識障害(時間・場所)が著明でその他計算力、実行機能、視空間の失認症状を認めた。MRIでは広範囲に白質病変を呈し、内部にはFLAIRでhypointensityを示す部分がまだら状に含まれていた。またSPECTにおいては前頭葉・海馬傍回の血流低下、脳波はび慢性